

徹底的学校改革者同盟の歴史教授学者としての
ジークフリート・カヴェラウ

船尾日出志
(哲学教室)

Siegfried Kawerau
als ein Geschichtsdidaktiker des Bundes entschiedener Schulreformer

Hideshi FUNAO
(Lehrstuhl für Philosophie)

1. はじめに

ドイツの改革教育学運動において独特の位置をしめた徹底的学校改革者同盟。そのメンバーで、同盟を最初から最後まで指導したパウル・エストライヒの腹心であったジークフリート・カヴェラウ¹⁾は、わが国においてはほとんど知られていない。かれの生涯および業績に関する詳しい論述は存在していない。したがって、筆者が最近発表した小論のなかでカヴェラウの歴史教育および平和教育についての考えを多少なりとも紹介できたことは、カヴェラウ研究に先鞭をつけることになったと考えている²⁾。

旧東ドイツでは、『教育の歴史』³⁾のなかで、カヴェラウはワイマル時代の指導的な社会民主党系の教育学者および学校政策家の一人として紹介されているが、その論述はわずかに十数行である。しかも共産党の教育学と陶冶政策を絶対善とみる立場からの一面的な評価しかなされていない⁴⁾。

旧西ドイツにおいても、そして現在のドイツにおいても、基本的にはカヴェラウはほとんど注目されていなかったし、注目されていないと言える。改革教育学運動についての古典的文献と言えるシャイベの『改革教育学運動』⁵⁾でも、徹底的学校改革者同盟については4頁にわたって、しかしおおざっぱに、叙述されているが、カヴェラウについては他のメンバーと並べてその氏名がただ一度、挙げられているだけである⁶⁾。同様のことはレールスやエルケルスの改革教育学研究についても言えることである⁷⁾。

もっとも旧西ドイツにおいては、1960年代後半からパウル・エストライヒおよび徹底的学校改革者同盟の研究が少しずつ前進し始め、1970年代半ば以降には、その成果が徐々に発表され⁸⁾、それとともなってカヴェラウに論及する研究もみられるようになった⁹⁾。そして1980年に刊行されたノイナーの徹底的学校改革者同盟についての本格的な研究では、カヴェラウについて1節が設けられている。そこにおいてノイナーはカヴェラウの生涯、かれの教育思想と教育理論を要領よくまとめている¹⁰⁾。別の節ではカヴェラウとエストライ

ヒの関係の破綻の背景についても論じられている¹¹⁾。ここではそのようなカヴェラウに関するノイナーの論述を抄訳紹介する。(したがってこの小論は、むしろ翻訳論文であり、筆者は訳者と称した方が正確であるかもしれない。)

注

1) 本格的なエストライヒ研究を最初に刊行したベームは、エストライヒとカヴェラウの関係を次のように述べている。「とりわけジークフリート・カヴェラウと、エストライヒは非常に緊密な仲間関係とならんで、親密な思想交流を結んだ。その交流は私的領域においてもまた双方の家族の間で育まれた。」(Böhm, W.: Kulturpolitik und Pädagogik Paul Oestreichs, Verlag Julius Klinkhardt, Bad Heilbrunn/Obb, S. 135) もっとも後に両者は対立し、カヴェラウは同盟を離れることになるのであるが。

2) 『パウル・エストライヒ——徹底的学校改革者同盟の歴史教育・平和教育』(学文社, 1996年)

3) Herausgeberkollegium: Geschichte der Erziehung. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, 1987

4) 例えば、次のように書かれている。「カヴェラウは階級闘争を教育によって置きかえ、そしてそれによって社会を改革しようとした。かれはなるほど全教育=陶冶過程の社会学的制約性を示し、さらにまたブルジョア的学校教育没落の適切な例を論じたが、しかし教育制度と学校制度の社会主義的変革には社会体制の変革が先行しなければならぬということ認識しなかった。」A.a.O., S.567

5) Scheibe, W.: Die reformpädagogische Bewegung, Pädagogische Bibliothek, Beltz 1994

6) Ebd., S.318

7) Röhrs, H.: Die Reformpädagogik. 3., durchgesehene Auflage, Deutscher Studien Verlag, Weinheim 1991; Oelkers, J.: Reformpädagogik. Juventa Verlag, Weinheim und München 1989.

8) その点については拙著『パウル・エストライヒ』

4頁以降参照のこと。

9) その代表的なものは次のフーンの研究であり、筆者は前掲拙著で参照した。Huhn, J.: Politische Geschichtsdidaktik. Kronberg/Ts. 1975

10) Neuner, I.: Siegfried Kawerau, in: Neuner, I.: Der Bund entschiedener Schulreformer 1919—1933, Verlag Julius Klinkhardt • Bad Heilbrunn/Obb, S.213—228.

11) Ebd, S.125—132.

2. ノイナー著「ジークフリート・カヴェラウ」の抄訳

(凡例：原注は 1) の記号で示し、訳者注は [1] の記号で示す。)

ジークフリート・カヴェラウの生涯および業績に関する詳細な論述は今日まで存在していない。最も重要な生涯のデータは若干の短い百科事典的論述のなかに示されている¹⁾。ニーダーホフやクンツェの未刊行の研究は、それらはジークフリート・カヴェラウという人物を詳細に研究しているが、その生涯の叙述においてほとんどもっぱら1928年のカヴェラウの自伝を引き合いにだしている²⁾。その自伝³⁾をカヴェラウは100部印刷し、そして友人あるいは親戚に謹呈した。カヴェラウの生涯についての以下の覚書はしたがって同じく唯一の詳細な資料としてのその『自伝』に依拠している。

(1) 略 歴

① 家族／研究／就職／結婚

ジークフリート・カヴェラウは1886年7月8日にベルリンで生まれた。かれの父親はヴィルヘルム・ギムナジウムの音楽教師であり、合唱協会⁴⁾の副会長であり、そしてマットホイス教会および大聖堂のオルガン弾きであった。かれの曾祖父および祖父は教育的に活動していた。総じてかれの先祖たちのなかでは、教師と牧師がしばしば登場する。カヴェラウ家は非常に宗教的であって、そしてジークフリートはその伝統をかれの子ども期と青年期に自明のこととして受け入れた。かれの兄であるワルターは牧師となり、そしてかれの姉は牧師と結婚し、かれ自身は一時期、神学を研究したいという願いをもちた。

かれの父親を、カヴェラウは非常に敬虔で、そして完全にかれの職業に向いていると描写し、母親を厳格で、義務履行と誠実性を具現していると描写した。かれの青年期における強い宗教的思慕は、かれが述べているように、かれには母親が確かに与えることができなかった愛ある接し方への思慕と結合している。かれの思春期のさまざまな苦悩のなかで、かれは自分の両

親によって放任されていると感じていた。それらの困難から、かれは後に激しく、ブルジョア家庭にとっておおいに当てはまっているそれらの問題のタブー化と闘った。

1904年に、かれは大学入学資格試験を済ませ、そして歴史と芸術史の研究を開始した。1910年にかれは中等学校における教科ドイツ語、歴史およびラテン語の教授資格をえて、そして博士の学位もまたえた。

一年後、かれは従姉妹のアンナ・マグダネラ(Anna Magdalena)と結婚し、そしてブカレストの福音派教区の上級実科学校の教師の地位をえた。二年後、かれはドイツに戻り、そして1918年までランズベルク／ワルテで教えた。

② 戦争体験／平和理念／国民共同体

すでに戦争以前に、カヴェラウは自由意志で軍事訓練に参加していた。戦争勃発後、徴兵されたとき、かれは当初は熱心に兵役に就いた。1915年にヴェグデンで生き埋めにされ、もはや戦争任務に適さないと判定され、そして郷土に戻された。

かれ自身はかれの自伝のなかで戦争体験に重要な意義を与えた。「耽美的に活気づけられた、そして快適な生活」から、かれは自分が「突然に無権利者の階級に、兵卒の身分に切り離された」のをみた。そして「古いドイツにとってはその身分の上のどこかで、ようやく人間が始まった。」⁵⁾

生き埋めより後の時代に、かれには戦争の無意味さがますますより明確になった。もっとも、かれはさしあたりその変化から徹底した結論を引き出すことはなかったが。当時のかれの政治的教養を、かれはきわめて貧困であるとしている。かれにとって刻印的であったのは、皇帝および教会に忠実な立場、およびかれの家庭のブルジョア的思考であった。それらから、かれは、少なからずの疑念および葛藤にもかかわらず、自己を引き離していなかった。そのように考えると、かれが1914年に、ドイツが指導しなければならない純粹の「防衛戦争」についての皇帝の言葉に信頼を寄せたことも理解できる。

1916年のランズベルクへの帰還後、かれは「兄弟たちが苦しみそして血を流している間、実行を」義務づけられていると感じた⁶⁾。

かれの理念は、平和を精神的に準備することであった。「今、ついに平和になったならば、その場合、炭鉱労働者はかれのほこりだらけの真っ暗なかでの労働に戻り、そして、かれが疲れて大学教授の住居の明るい窓の傍らを通り過ぎるとき、拳を握るべきなのか。…その大学教授は、自分の服を汚さないために、労働者への嫌悪の表現をしながら遠ざかるのか。…そんなことは許されない。塹壕がなんときわめて際限なく栄えるのか、をみてとっていた共同体および兄弟性の精神、その精神をわたしたちは保持しなければならない。

そしてわたしたちは、それをわたしたちは故郷に確かに有しているのだが、わたしたちは、わたしたちの故郷に帰った兄弟たちが今後また、肩をよせあって並び、そして国民および祖国の幸福のための共同の労働をおこなう機会をもつことに尽力するという聖なる義務をもっている。」⁷⁾

③ 1914年同盟／社会的帝政／古い理想からの離脱

家柄と職業への配慮なしに、すべての人間が所属すべき国民共同体が、将来へのかれの希望であった。かれはランズベルクに「1914年同盟」を創設した。その同盟には、その国民共同体の準備という目標をもつすべての政党と団体が所属すべきである。カヴェラウは直ちに、その同盟が「抑制されたブルジョア・ブロック政策の路線」に落ち込み、そして社会民主党にたいする闘争道具として利用されていることを確認し、そして組織の指導を放棄した。そのプロジェクトの挫折後、かれは自分の考えを「構成された生活——戦争後の課題」という全体テーマをもつ一連の講演会のなかでまとめ⁸⁾、そしてその考えを一般に紹介した。かれの主要関心事は土地改革、学校制度の更新、宗派主義の克服であった。「わたしが初めて意識的に闘争的に公共社会に登場したときもっていた考察のすべてにおいて共通していることは、生活の統一性への意志であった。すなわち、感覚生活と精神生活の間の、認識と行為の間の統一性、国民生活における頭脳労働と手労働の間の統一性への。」⁹⁾

それらの新しい認識にもかかわらず、かれの皇帝及び国家との同一化は、なおかなり存在した。かれは「社会的」帝政を表象した。そこでは、あらゆる者が自己の権利を——平等の権利ではない——有している帝政を。それゆえ民主主義の考えには、カヴェラウはその時点においてはまだ拒絶的な立場であった。1918年にかれはまだヴィルヘルム二世の誕生日演説をおこなっている。その演説をかれは信義の誓いでもって締めくくったほどである。ようやく皇帝の逃亡が、それをカヴェラウはドイツ国民への見殺しと感じたのだが、かれの古い国家理想と社会理想からの完全な離脱をもたらした。

④ SPD／エストライヒ／徹底的学校改革者同盟

社会民主党のなかに、かれはかれの国民共同体思想の実現が最良の仕方では保証されているのを見て、そして1919年にかれはベルリンで、そこではかれはその間にフルステン・ビスマルク・学校の教員として活動していたのだが、当時の多数派社会民主党に属した。同時に、かれはかれの家族とともに福音派教会から抜けた。というのは、福音派教会は古い権威をおおいに支え、そして内的改革によりも、その権力的地位の維持に関心をもっていたように思えたからであった。1918年にかれはすでに論文シリーズ「国家と教会の分離」を発表した¹⁰⁾。それらの決断は明確にカヴェラウの

変化を、そしてかれの家およびかれの青年期からかれが離れ去ったことを示している。

11月革命と共和国樹立後、多くの人々のなかに出現した新しい、より良い社会の実現への希望はカヴェラウをもまたとらえた。かれが1919年にパウル・エストライヒに出会ったとき、かれはエストライヒの「闘士魂」によって魅了させられ、そして「徹底的」改革者たちの小さなグループに加わった。1919年9月には、かれは同盟の創立に関与して決定的な役割を果たし、そして最初から幹部の一人であった。同盟の活動にとってのかれの意義は、かれの数多くの職務において読み取られる。すなわち1920年から、かれは機関誌『新しい教育』(Neue Erziehung)における同盟の近況報告欄を編集し、そしてその発行の責任者の一人であった。かれは一時的に議事録を指導し、重要な大会演説者であって、そして歴史教授と公民教育の諸問題を研究した。1922年に、かれは同盟の年代誌を発行した¹¹⁾。

同盟のこの構築段階に、カヴェラウの執筆の最も実り豊かな時代もまたあった。

フルスティン・ビスマルク学校の校長ブルク博士との裁判ごたの後、かれは1922年に市立のソフィーエン学校に移された¹¹⁾。

⑤ 徹底的学校改革者同盟からの脱退

1925年にカヴェラウは徹底的学校改革者同盟から脱退した。かれの自伝においては、そのことについて次の1文しかない。「1925年9月6日、わたしはエストライヒ教授との個人的いさかいのゆえに、同盟と決別した。」¹²⁾ しかし同盟における活動についてのかれの短いコメントから、カヴェラウが引き続き同盟の目標と行為を信奉していたことが明らかとなる。すでに前で述べられているように¹²⁾、パウル・エストライヒとの論争においては客観的な論拠は決定的であったのではなかった。目立つのは、その重要な時代がかれの回顧のなかではきわめて簡潔に取り扱われ、そしてカヴェラウはどこでも同盟からの脱退についてのかれの感情的な反応に言及したり、あるいはそのことについての厳密な理由をあげていない。パウル・エストライヒの人柄についても、かれは同じく発言していない。

⑥ 同盟脱退後の生活／ナチスによる拘禁／死亡

公における——公演会、新聞論説等——かれの活動は1925年以降、急速に後退した。あたかも、かれから同盟の活動の課題とともに、活気と意志力が奪われたかのように思えた。その時点までに除名されたすべての同盟員のうち、カヴェラウは確かに最も狼狽した。というのは、かれは当初から同盟の活動のリーダーの一人であって、そして永くエストライヒと友好関係にあったからである。かれはまた、例えばフランツ・ヒルカーやアンナ・ジームゼン¹³⁾と違い、別の諸領域でそれほど熱心であったわけではなく、むしろ同盟に一身を捧げていた。しかもかれは脱退後もまた、学校改

革および社会改革についての自分の考えが徹底的学校改革者同盟のなかで最良の仕方では実現されていると考えた。

1927年に、かれはケルニッシュ・ギムナジウムおよびケンフ学校の校長に任命された。両方とも上構学校で^[4]、何より労働者の子弟が通っていた。1925年から1930年まで、かれはベルリンの市会議員（SPD所屬）であり、そしてシャルロテンブルク区の学校委員会委員であった。

ナチスによる権力掌握直後に、早々とカヴェラウは拘束された。1933年秋には、かれは釈放され、そして退職させられた。1936年に、かれはベルリンで肺ガンで死亡した。おそらく刑務所時代の劣悪な扱いの影響もあったのであろう。

（2）業績

ジークフリート・カヴェラウの業績で目立つのは、かれがとりわけ、かれ自身の成長過程のなかで困難を覚えた諸領域に取り組んだということである。例えば宗教、政治的陶冶、歴史理解、性的問題等…である。目標はかれにとっては明らかに、若者を早期に手助けし、そして若者をかれらの諸問題において孤独にしないということであった。当時のブルジョア家庭にとって間違いなく典型的であったといえるかれ自身の家庭の欠陥性は、かれがその重要な教育課題を学校に任せようとさせることの原因となった。

次に、カヴェラウの重要な陳述によりながら、上述の諸領域についてのかれの立場、ならびに教育学と学校改革についてのかれの見解を追求しよう。そのために、何よりかれの著書『社会学的教育学』^[5]から引用することにしよう。もっとも、カヴェラウの場合もまた、簡単な概略しか与えることができないが。

① 宗教教育について

思春期と同時に、カヴェラウにとって、信仰をめぐる闘いが始まった。かれの歴史についての研究から、キリストの神性と比類なきへの疑惑が生じた。キリスト教はかれには突如、常時変化しうる歴史的・宗教的運動でしかないように思えるようになった。宗教の本質に関する問いに、カヴェラウは1921年にゲーテのヴィルヘルム・マイスターを指摘しながら書いた。「近代の人間は徹底的に、畏敬が宗教の本質、精神であるというその認識の真理性を感じている。わたしたちは今日まったく正確に、視覚できる世界の背後に、わたしたちにとってはまったく理解できない恐ろしい暴力があることを知っている。」^[6]

カヴェラウは——アンナ・ジームゼンと似て——決して宗教や宗教性に反対したわけではない。かれの批判は何よりも、従来あまりにも国家および社会の権力グループに貢献していた教会制度にたいして向けられ

た。「かくして家庭の時代は父親（Familienvater）、国主（Landesvater）、父なる神（Gottvater）とともに、私有財産を無制限に意のままにする国家と教会のためのシステムを生み出した。有効な法は無産者の権利喪失性の確定でしかなかった。そのことは贈り物、報酬、慈悲…によって軽減された。私有財産を無制限に意のままにできる権利の消滅でもって、土地および資源、水力、空気および電気への、交通手段および生産手段等への一般性の法的要求でもって…古い意味における国家はもはや存在せず、慈悲の宗教はもはや存在しない。」^[7]

鋭くかれは、保守的な諸勢力が再三、教会の助けをえて自分の権力を支えようとしたことを批判した。そしてそれゆえ国家と教会の分離は—何より宗派学校の廃止のもとで—かれの本質的な要求のひとつであった。そのような認識にしたがえば、宗教教授が変わることが必要であった。かれは、宗教教授は畏敬の上に構築されねばならない、畏敬から「公正さ、真実性および自己責任が、つまりそれらなしにある共同体は存続しえないような社会的な徳が」生じるという意見をもっていた^[8]。

さらにかれは、当時、諸学校において通常であった必修の催しとして宗教的教義教授は教科群から追放されねばならないと考えた。カヴェラウが理解していた宗教、すなわち隣人、世界の力の創造あるいは神秘にたいする畏敬は「生活」であって、そして一定の授業において媒介されるべき「理論」ではなかった。畏敬は「新しい学校における全教授の自明の背景で」あった^[9]。

かくして、最高の人間陶冶の目標と緊密に結合した全学校生活の宗教性が要求された。「宗教的」人間は、十分な責任をもって自分自身の能力およびさまざまな力を用い、そして世界を兄弟性、寛容および公正の原理にしたがって構成しようとし、そして自己のさまざまな個人的可能性を共同体に貢献させるような人間であった。

情熱的にカヴェラウは家庭における慣例的な宗教教育の若者たちの性的発達への「悪い」影響と闘った。「今日、誠実に、かつ明確にその問題に言及される場所では、常に若者の隊列から半分抑圧された絶望の叫びが答える。」^[10]

② 性教育について

ブルジョア的の二重モラル^[5]の打破によって、そして新しい身体感の発達によってのみ、若い人々に援助できる。ヴィネケン^[6]のように、かれは身体と精神の統一性を要求した。「古い知性主義的分離と精神的なものの一面的な評価は、身体への新しい喜びによって、自己の身体との新しい自己同一化によってますます克服されるであろう。」^[11]

カヴェラウは、身体最高の自然性を再獲得しよう

とするかれの志向のなかで、例えば裸体主義運動もまた支援した。

性的なものや性教育についてのかれの見解、およびそれと結合した家庭にたいする批判でもって、かれはきわめて激しい敵視を経験した。自伝のなかで、かれはそのことについて次のように苦々しく書いている。「わたしはブルジョアジーの憎悪を認識したし、経験した。…本質的に古い教育の核心に触れるものにたいする古い社会の憎悪は命取りとなる。そしてヒステリックな圧力の作用点は宗教の問題と性の問題である。両方の場合とも、わたしは古い社会にたいして診断を設定した。」²⁰

身体の再発見はかなり広まっていたその時代の運動であって、そして人間の全面発達と一面的な理性陶冶からの方向転換を要求した徹底的学校改革者同盟において重要な役割をえんじた。例えばフリッツ・ヒルカーは数多くの論説のなかで身体訓練と体育に取り組んだ。パウル・エストライヒも同じである。ジークフリート・カヴェラウはかれのヌーディズム運動にたいするかれの極端な立場のせいで同盟のなかでは、もちろんまったく支援をみいだせなかった。パウル・エストライヒはかれにたいして逆にしばしば、かれがその見解でもってさまざまな困難に陥るだろうと指摘した。というのは若者にたいする援助遂行のかれの一貫して肯定的な見解は、多くの者によって誤解されるだろうから。

③ 歴史教育と政治教育について

かれの家庭からそのことについて一切、提起をえることがなかったゆえに、カヴェラウが成人になって初めて明らかにできたもう一つの領域は、歴史的・政治的陶冶を包括していた。かなりの中等学校で普通であったような、事実知識の無批判的媒介としての、「偉大な」ドイツ人の生活史への限定としての、そして度の越えた民族主義と愛国主義のための出発点としての歴史教授と、カヴェラウはきわめて先鋭に闘った。かれにとって歴史的陶冶は完全に別の目標設定をもっていた。「それゆえあらゆる歴史教授において、真の人道性こそが重要視されるべきであるのに、従来、主要な役割をえんじてきた素材はほとんど重要ではない。…国民共同体と人類共同体の理解のための、それらの共同体の法則と生成と本質に関する知識のための、それらの共同体において自己責任をもって共同活動しようとする意志のための教育が大切である。…従来のだグマ的な教授にたいして、わたしたちは完全に意識的に問題性の道を歩まねばならない。何が起こったかは比較すれば、どうでもいいことである。どのように起こったかが大きな意義をもっている。まったく同じ事象を非常にさまざまな視点から考察することは、必要となるだろう。」²¹

カヴェラウの提案は、歴史教授をおよそ14歳以降の

すべての生徒にとって必修科目として導入するということであった。それ以前には、さまざまな歴史的関連と出来事は郷土科教授のなかに入るべきであるとされた。素材は、かれの意見によれば、1500年から現代までの時代に限定されえた。古代と中世の本質的な諸問題は特別な問題の取り扱いに際して採り上げるべきであるとされた（例えば、「支配形態」というテーマとの関連で。）²²

さらに、本質的な要求は、歴史が将来的には文化史と経済史と社会史としてもまた理解されねばならないということであった。若干の基本的問題設定によりながら、かれはその新しい歴史的・政治的教授についての理解を明確にしようとした。「何が一般性の幸福のために起こったのか。国民の状態はどうであったか。公的生活における相互援助はどのように構成されるのか。どの程度まで、進歩について語りうるのか。いわゆる『偉大な』人々はいかゆる時代の代表的人物として現れているのか。ますますより多く、歴史的運動の不可避性は認識されうる。最終的に、経済的・被制約性の法則について対応されねばならない。…そしてその方法の可動性から、自己の対応、自己の決定・決断力の必要性が鋭く、しかし明確に分かる。」²³

他の教科におけるように、歴史教授の方法もまた「獲得」^[7]の方法でなければならぬとされた。最も重要な事実、表にまとめられて、生徒たちに教授のなかで眺められるよう常に前におかれる。そのために必要な歴史年表はカヴェラウによって若干の類似の考えをする者たちと共同で1921年に刊行された²⁴。目標は素材の完全性ではなく、いくつかの本質的範例的例による歴史的諸事件の解釈であった。

歴史教授がそれらの原則にしたがって構成されたとしたなら、公民的陶冶を独立した教科として導入することはもはや必要ではないとされた。「公民的陶冶は歴史教授全体の社会学的な基本的立場から、それは学校の共同生活から、学校自治会における若者の自己責任と自己決定から生じる。日々の生活における基本的練習のない公民的教示は陸での水泳練習のようなものだ。」²⁵

④ 学校について

生活学校である学校においてのみ、理論的知識媒介と日常における実践的適用の恒常的な結合へのそのような根本的要求は満たされえた。カヴェラウはすでに、かれが1919年にエストライヒや言語学者連盟^[8]のなかの進歩的なグループと組織を作り上げる以前に、新しい学校の構成について研究していた。学校改革についてのその最初の論説から、かれの学校の社会的被制約性および課題についての理論がはっきりとみえる。「国民の学校は…現代における経済的諸関係および過去からの精神的伝承の必然的所産である。…客観的に思考する学校改革者たちにとって、学校をまづもつ

て現代の経済的諸関係を、わたしたちが真の社会的学校をえるということを考慮した場合に、国民の目下の内的過程に相応するような陶冶内容でもって満たすことが重要であろう。」²⁰⁾

この時期に学校制度の男女共学制と世俗性と統一化にたいする要求が明かとなっている。統一学校の建設にたいするかれの提案²¹⁾を、かれは徹底的学校改革者同盟員たちとの集中的な討議以前に作成していたのだが、エストライヒの構想を知った後に廃棄した。というのはエストライヒの構想は現存の学校システムからより以上に解放されていたからである。1919年から1921年までの同盟内での統一学校モデルの作成において生じたさまざまな変化は一貫してその時期におけるカヴェラウの発展を反映している。出発点は1919年の「リベラルな労働学校思想」であって、1920年には「体験学校思想」との対決のなかで「闘争と成熟」が続き、1921年までに「生活学校と生産学校」のモデルにおいてその活動のクライマックスと目標が達成された²²⁾。

さまざまな、学校構想の作成において決定的に関与した同盟員たちの個々の貢献を明かにすることは非常に困難である。それでも創造的教育の領域におけるヒルカーの影響、職業学校の有機的内的編成の問題におけるジームゼンやエシヒ¹⁹⁾の影響は指摘されよう。同様に統一学校の歴史教授の構成にとっては、カヴェラウの表象が援用された。根本的教育学的・組織的諸問題においては、エストライヒによって下書きされた弾力的統一学校のモデルとのかなり強力な同一化が示されている。したがって、両者は学校改革とその実現について非常に似た見解を持っていて、そして相互に高めあったということが推測されうる。その都度の論説がエストライヒの業績か、カヴェラウの業績か明記されることはなかったが、両者にとって総じて特徴的であったこととしては、他の改革者たちの考えを受容しそして消化したことである。しかしその出典を常に紹介したわけではなかった。

⑤ 改革達成への道筋について

内容的諸問題においてのみ、エストライヒとカヴェラウの間に大きな一致が確認されうるわけではない。同盟の戦術的処置についての立場においてもまた、それは確認されうる。したがってカヴェラウは例えばかれの手になる1922年の同盟の編年史において、さまざまな部分領域において改革を引き起こす（例えば、実験学校の支援、行政への請願あるいは現存の学校システムのなかで直ちに実施されうる諸改革にたいする具体的提案によって）初期段階の努力から距離をとるようになった。「それは『個々の場合』についてのそれらの経験すべての苦い教訓であった：あれこれの反動にたいするあらゆる闘争は古い権力網とからまっており、際限なく時間、力および——わけでも大切なこと

は——お金を浪費し、そして決して満足な、明確な成果をもたらすことはない。古い官僚制（司法、行政）は互いにからみあっており、どのような個別的な打撃も受け流されてしまうのである。根本からの新しい秩序のみが変化を生み出しうるのである。ますますより以上に全体的なものが問題になっている。」²⁰⁾

「全体」をめぐるその闘争を、そしてますますより以上にアジェーションを好むようになったことは、カヴェラウによって長期にわたって、エストライヒと同様に正当であると感じられた。可能な限り集中的に同盟の活動に貢献できるように、カヴェラウは例えば社会民主党における自己の活動を限定し、かれに申し出られた社会民主党教員組合の役員職を断った。カヴェラウは、例えばかれの主著『社会学的教育学』のなかで提出しているような「新しい教育」を、すでに「体験学校——生活学校——生産学校」という同盟の学校構想と教育構想²⁰⁾のゆえに放棄することができた。

⑥ 教育社会的被制約性

しかしここで、より厳密に考察されるべきは、あらゆる教育の社会的被制約性のまとまった理論の発展についてのカヴェラウの注目に値する試みである。

すべてのかれの考察の出発点は、社会は教育において伝えられるというパウル・バルト²¹⁾の命題である。そこからカヴェラウにとっては2つの結論が生じている²²⁾。

- あらゆる政治的・経済的状況は陶冶目標と訓育目標および学校組織に影響する。
- 教育過程のなかで社会の継続存続のために必要な基礎が媒介される。

「かくして教育学は…間接的に国家の役所の圧力によって悪用される。現存の秩序を維持するために。そして国家の権力関係に完全に似て、学校における絶対主義が実行される。」²³⁾新しい教育がどのように構成されねばならないのかを知るために、現存の社会の詳細な像を調査することが必要であるとされた。その社会学的分析はかれの全教育活動の基礎であって、そしてかれがそこにおいて獲得した認識は——当時の教育学の討議の水準を考慮した場合——注目に値するものであった。例えば、かれは教育の社会生態学的・社会経済学的・社会文化的（カヴェラウはそれらを、自然的・経済的・精神的、とよんだが）諸要因への依存性について²⁴⁾、あるいは下層階級に属する人々が中等学校に通うことをほとんど不可能にしている「言語バリアー」について描写している²⁵⁾。

かれのやり方については、もちろん批判的に次のように述べられねばならない。つまり、かれのやり方はいくつかの科学的基準を満たしておらず、そしてむしろ、同時代の科学論的諸構想におくれをとった意見と経験的研究と世界観的予断の混合物であると言われねばならないと。

教育によって未来の社会が準備されるとするなら、その社会が暴力的な崩壊状況にあるとするなら——その際カヴェラウは労働運動と青年運動と婦人運動を、議会制民主主義の導入を、ならびに変化した生産条件を引き合いにだしたが——、その場合、新しい教育は巨大な意義を獲得する。この点で、カヴェラウは他のたいていの進歩的信条をもつ教育学者たちと同様に考えている。

成立しつつある社会はカヴェラウにとって「国民共同体」あるいは「生活共同体」であった。そこではすべての人間は家柄、性別、宗派、職業、収入への配慮なしに、同権的に一緒に生活するのである。そのような共同体を達成するために、共同体は教育過程にとって（そしてそれをもって学校制度の構成にとって）本質的な意義をえなければならない。労働と共同体（連帯性）の概念はカヴェラウの意見によれば未来の学校の基礎概念である。それらの力によって支えられた学校のみが、成立しつつある社会の学校であるという要求を掲げることができるのである。カヴェラウにとっては、その課題は生活学校と生産学校によってのみ解決されえた。

(3) 総括

要約的に、徹底的学校改革者同盟におけるカヴェラウの独自の貢献として、歴史教授および教育の社会的被制約性についてのかれの論述が明確に認識されうると言うことができよう。どの程度までそれらの認識が個々に統一学校モデルに関する論議のなかに流れこんだのか、そしてその他のどのような提案が時々カヴェラウによってなされたかは、確認されない。目立つのは、パウル・エストライヒの思想と立場との大きな一致である。

加えて、カヴェラウのそれらすべての論述から、かれがなるほど教育の目標として同じく全面的、創造的、責任意識の人間を要求したが、しかし個人的発達、つまり個人々の可能な最高の促進の諸問題については、事のついでにしか言及していない。かれの思考の中心には常に共同体、およびその共同体のための、そしてそれとともに新しい社会のための若者たちの教育があった。

パウル・エストライヒあるいはアンナ・ジームゼンに似て、ジークフリート・カヴェラウもまた「政治的教育学者」とよばれる。教育学的問題と政治的問題はかれにあっては切り離しえない。「新しい教育」は、同時に政治的変革があるときのみ可能である。それ以上に、その教育によって新しい政治的秩序、つまり自由国民共同体が可能とされるのである。

原注

- 1) Vgl. z.B. den Artikel von A.Ehrentreich, in : Neue Deutsche Biographie
- 2) Niederhoff, H. : Siegfried Kawerau und sein Beitrag zur entschiedenen Schureform, Examensarbeit der PH Berlin 1964 ; Kunze, J. : Grundlegungsfragen und didaktische Probleme in der Pädagogik Siegfried Kaweraus, Diplomarbeit des Päd. Inst. Würzburg 1978.
- 3) Siegfried Kawerau: Selbstbildnis, Leipzig 1928
- 4) 1781年のベルリンに創設され、その後各地に同じ名称の組織が設置された。
- 5) Kawerau : a.a.O., S.17.
- 6) Ebd., S.22.
- 7) Ebd.
- 8) Ebd., S.23.
- 9) Ebd., S.27.
- 10) Kawerau : Zur Trennung von Staat und Kirche, in : Freideutsche Jugend 1918, S.16-20 / S.87-92 / S.202-204.
- 11) Kawerau : Der Bund entschiedener Schulreformer, Berlin 1922.
- 12) Kawerau : Selbstbildnis, a.a.O., S.34.
- 13) Siegfried Kawerau : Soziologische Pädagogik, Leipzig 1921.
- 14) Ebd., S.144f.
- 15) Ebd., S.177f.
- 16) Ebd., S.178.
- 17) Ebd., S.225.
- 18) Siegfried Kawerau : Sexualität und Erotik, in : Neue Erziehung, 1920, S.202
- 19) Kawerau : Soziologische Pädagogik, a.a.O., S.79.
- 20) Kawerau : Selbstbildnis, a.a.O., S.35f.
- 21) Kawerau : Soziologische Pädagogik, a.a.O., S.230f.
- 22) Siegfried Kawerau : Der soziologische Ausbau des Geschichtsunterrichts, In : Der freie Lehrer, 1920 (2.Jg.) , Nr.6, S.41f.
- 23) Kawerau : Soziologische Pädagogik, A.a.O., S.232.
- 24) Siegfried Kawerau : Synoptische Geschichtstabellen, Berlin 1921
- 25) Kawerau : Soziologische Pädagogik, A.a.O., 231.
- 26) Siegfried Kawerau : Grundsätzliches zum Neuaufbau der Schule, In : Der freie Lehrer 1919, Nr.5, S.34
- 27) このプランは次の箇所に叙述されている。 Siegfried Kawerau : Zum praktischen Aufbau der Einheitsschule, In : Der freie Lehrer 1919, Heft 11, S.84f.

- 28) Siegfried Kawerau : Der Bund entschiedener Schulreformèr, Berlin 1922
 29) Ebd., S.27
 30) Kawerau : Soziologische Pädagogik, A.a.O., S.2
 31) Ebd., S.39
 32) Ebd., S.2f. und S.108f.
 33) Ebd., S.122

訳者注

[1] この裁判はカヴェラウの性教育実践にかかわっておこなわれた。自身の育ちにかかわって、カヴェラウは、文化批判的な立場をとる同時代人の多くと同様に、自然な身体感とそれによって緩められた夫婦および親子間の性的雰囲気のなかに、かれが自身の家庭において体験した道徳性および家庭生活の崩壊に対抗する可能性をみた。その理由からかれは繰り返し、日常にオープンにかれの女生徒たちと愛、結婚および性生活について語り合った。

その裁判でのかれにたいする本質的な非難は、かれが女生徒たちに「自由恋愛」を要求したという点にあった。一人の女生徒の証言が告訴の始まりであった。しかし裁判の経過のなかで、その証言が不確かであることが明らかになった。最終的には両者は和解した。

エストライヒはすでに1920年の時点において、カヴェラウの性教育観をあまり強く社会的に表明しないよう望んでいた。というのは社会はまだそれほど成熟していないと、エストライヒは考えていたからである。裁判についても、エストライヒはそれによって徹底的学校改革者同盟の名誉に傷がつくことを恐れた。というのは同盟のナンバー2であったカヴェラウはすでに有名だったからである。(Vgl. Neuner, I. : A.a.O., S.126f.)

[2] Vgl. Neuner, I. : A.a.O., S.126—149.

[3] ヒルカー (Hilker, E. 1881—1969) とジームゼン (Siemens, A. 1882—1951) は共に、1920年5月にチューリングゲンに誕生した左翼政権の招聘に応じて、当地における教育改革に取り組んだ。拙著『パウル・エストライヒ』の20頁および29頁～30頁参照。

[4] 上構学校 (Aufbauschule) は、主に田園地方に誕生した。しばしば廃止された師範学校跡に。ベルリンを除くプロイセン全体に、1926年には63の上構学校があった。規定では上構学校は民衆学校の第7学年に接続した。6年間履修すると、アビッターに挑戦できた。上構学校には、労働者および農民の才能ある子弟たちもまた入学した。Vgl. Herausgeberkollegium : Geschichte der Erziehung. a.a.O., S.587.

[5] ブルジョア的・二重モラル：例えば他人に人権意識を求めながら、自分自身の差別性については気づかない人は二重モラルの持ち主と言える。

[6] グスタフ・ヴィネケン (Wyneken, G. 1875—1964) は、1900年から1906年まで、やはり改革教育学運動の一翼を担った田園教育舎の創設者であるヘルマン・リーツ (Lietz, H. 1868—1919) のもとで教師として活動した。しかしリーツをフューラーとする国民的・民族主義的雰囲気の強い学校を嫌い、1906年にはパウル・ゲヘーブ (Geheeb, P. 1870—1961) とともに自由主義的・民主主義的雰囲気のより強い田園教育舎を創設した。Vgl. Herausgeberkollegium : Geschichte der Erziehung. a.a.O., S.457.

[7] 「獲得」：原語は Erarbeiten, 「努力してわがものにする」の意味

[8] 「言語学者連盟」については、拙著『パウル・エストライヒ』の97頁以降参照のこと。

[9] オルガ・エシヒ (Essig, O. 1884—1965) は特に、教育と科学と社会の関連に関心をもっていた。拙著『パウル・エストライヒ』20頁参照のこと。

[10] 同盟の学校構想と教育構想については、拙著『パウル・エストライヒ』の60頁以降および、拙稿「体験学習の先駆者としてのパウル・エストライヒ」、『愛知教育大学研究報告』第43輯、1994年参照のこと。

[11] パウル・バルト (Barth, P. 1858—1922) は教育史研究において評価されている。

Vgl. Herausgeberkollegium : Geschichte der Erziehung. a.a.O., S.26.

3. 今後の課題

性教育や解放的な歴史教授、学校と生活の結合、教育と社会の関連というような学校教育の今日的な教育重要問題を、すでにカヴェラウは提起していたことが、ノイナーの論述から分かった。それらの問題について、より詳細にカヴェラウの原典資料を読解、考察するという基本的作業をここでは展開できていないので、その作業が何より重要な課題である。その際、筆者は特にカヴェラウの歴史教授論をワイマル時代の学校教育論争のなかに位置づけて考察することを重視している。